

2017 年度

# 国 語

(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

① 『虫めづる姫君』を読んだ方もあると思います。短編集『堤中納言物語』に入っています。堤中納言というあだ名の藤原兼輔かみすけという人がいた。その人が作ったのではないかという説と、短編小説を包み込むという説もありますが、よくわかっています。成立したのは平安の終わり頃、院政期に近い。『源氏物語』『枕草子』<sup>②</sup>は平安時代の中頃ですが、それより後に成立した物語です。それまでの物語は長編小説がほとんどです。短編集ができたのは珍しく、これ以降もあまり短編集は作られていません。そういう意味でも新しい文学の形であったと言えるかと思います。

『堤中納言物語』で子どもが出てくるのは『貝合わせ』と『虫めづる姫君』です。按察使大納言の娘が主人公です。お姫様だけど、通常のお姫様のように、眉まゆを引いてお歯黒をするようなことはしない。虫が好きだという当時としては奇妙な性癖せいへきを有しているお姫様だった。虫といっても蝶々とか美しい虫ではない。皮虫という毛虫です。桜の木についている毛虫が好きで、集めては虫籠むしかごに入れて毛虫が大きくなる様を見守りたいという。彼女は奔放なところがありません。④ 理路整然とお父さん、お母さんに反発する。お父さん、お母さんが「姫君らしくしなさい」と言っても彼女は「繕つくろふことこそ悪けれ」。眉毛を抜いたり描いたり、お歯黒をつけたり、髪の毛を切ったりする繕うことはよくない。毛虫も繕っていいだろう。大事なのは本地だと。「本地」とは元という意味です。今、きれいな蝶であっても遡さかのぼっていくと、ただの毛虫なんです。蝶々になる前の毛虫、本地の方こそ大事だと彼女は考えているわけです。実質的、合理的な考え方をします。⑤ それでも姫君ですから、さすがに親に口答えをしても「鬼おにと女とは人に見えぬぞよき」。鬼は当時、目に見えない存在と言われていました。「女もあまり人前にでない方がよいと言うのね」と言いながら、一応きまつ几帳きちょうの影、移動できる間仕切りの奥に潜ひそんでいる。彼女は「あんな毛虫の好きなお姫様なんて」と言われながらも自分の態度を貫つらきまして、女房にようぼうからも敬遠けいげんされていますが、男の子たち、<sup>⑥</sup>下仕しもつかえの男の子たちはお姫様になついている。男の子たちに毛虫をとってきてくれと頼むわけです。男の子たちの名前も普通の名前では面白くないと言って、それぞれに虫に因よんだ名前をつける。けら男、おけらですね。土を掘ほったらいるんです。そんな地中に潜む虫の名前をつけたり、ヒキ鷹まろ、ヒキガエルのことです。カナカガチとかイナゴ鷹、アマ彦とつけている。今、<sup>⑦</sup>考えている虫とは範囲はんいが違ちがうことがわかります。『虫めづる姫君』の虫は毛虫に代表される気持ち悪いものです。へびもヒキガエルも虫の範囲に入っている。へびは長虫と書きます。昔は虫の一種と考えられています。人から嫌きらまれるものが好きなのが虫めづる姫君の性癖です。虫をたくさん集めては見守っている。虫たちに聞かせるように歌を歌う。この歌は和歌ではありません。当時流行った今様いまようと呼ばれる歌謡曲かようきょくです。今様は『梁塵りやうじん

秘抄』が有名ですが、今風である。今様を虫に聞かせてご満悦なのです。

そういうお姫様の話をどこかで聞きつけたある男が、そのお姫様にちよっかいを出そうといたずらをします。彼は器用だったらしく、大きな袋の中に仕掛けをする。袋の口を開けたらへビがニュツと鎌首をもたげる仕掛けを作った。どうやって作ったのか学会では未だ謎ですが、びっくり箱のようなものを作った。それに歌を作ってお姫様に差し上げた。お姫様は開けてみて、さすがに「キヤー」とは言わない。自分は長虫も好きだということになっていきますので、女房たちが「キヤー」と言って逃げるのに対して、お姫様は「そんなことをしてはいけない。へビというものはもしかすると輪廻転生で、どこかで自分たちと血のつながったものであったかもしれない」と言って「騒ぐな」と言う。そこへお父さんがやってきて「なんだこれは作り物じゃないか」と看破して終わる。それを横から見ていた男、右馬佐はお返事をもらいます。

返事も普通のお姫様なら、紅の薄様とかきれいな紙に流麗な女手、ひらがなで書いて渡すはずなのに、彼女はごわごわした紙にカタカナで書いて送る。普通のお姫様とは大分違うことがわかります。

⑨ 右馬佐は変わった女だと思つて館の横で立ち見をしている。その時にお姫様が虫とりをするシーンがある。下仕えの男の子たちに虫をとらせて、お姫様は扇で虫を受けて喜んでゐる。下仕えの人が「お姫様、誰か見ている人がいます」。お姫様は男に見られることは恐ろしいことだったので、毛虫を袂に受けて走り込んで家の中に入ってしまう。この当時の女性は外に出ません。几帳の影に隠れて、父親が入ってきて、几帳や御簾ごしに対面する。女房が世話をする。だから「鬼と女は人に見えぬぞよき」。女の人は外に出ないで中に入っているのがいいという言葉があるわけです。当時、一三〜一五歳の結婚適齢期のお姫様がいたとすると、お年頃になると、外に出ないから、中納言の娘はどうだといつてもわからない。そういう時はそばにいる女房が積極的に情報を流す。「仕えているお姫様はとても美しい」。髪が長いというのは当時の美人の大前提です。長ければ長いほどいい。肌は白ければ白いほどいい。「こんなお姫様がいるよ」と女房がさりげなく巷に流す。噂を聞きつけた貴公子たちが「それならばいっぺん忍んでみよう」とまず手紙を出します。お姫様のところに来た手紙は読んでも返事は書きません。女房が適当に返事を書く。何回かやりとりをしてうまく男が引つかかいたら、女房が手先となつてお姫様とお見合いをする。同じ寝室に入れてあげる。虫めづる姫君の場合、どういふところから漏れたかわかりませんが、変わった性癖だけが外に流れている。普通の男性は見に来ません。しかし右馬佐だけは特別で、変わったところのあるお姫様を見に来た好奇心旺盛な人です。

特に、このお姫様は毛虫が好き。耳はさみは長い髪の額のところに短い毛がある。それを耳に挟むわけです。これは慎みがないものとされてい

て、お姫様は耳はさみをするものではない。労働するときは耳はさみをして毛が落ちてこないようにする。お姫様はそういうことをしてはいけな  
いのだけれど、このお姫様は髪の毛が落ちてくるのを煩うるさがって毛虫を可愛かわいがっているわけです。しかも「この内にうつ伏ふせて守りたまふ」。虫箱  
の中に寝ねかせてじっと見ている。冒頭を注意していただきたいと思えます。蝶めづる姫君の住んでいる傍かたらに虫めづる姫君の家があった。女らし  
いお姫様と虫めづる姫君の対比が現れています。おそらく対比の妙みょうを描えがくのではなく、本来、あるべき蝶めづる姫君のそばにちよつと変わったお  
姫君がいる。それは種明かすると、異常でも何でもない。蝶めづる姫君を出してきた背景には「虫めづる姫君」も少しずらして考えれば「蝶め  
づる姫君」にもなりうるのだと暗示しているように思われます。

(遠藤育枝編『子どもの本のちから―越境する児童文学』より一部改変)

(注1) 眉まゆを引いてお歯黒をする…眉毛まゆげを抜いて墨すみで眉まゆを描かき、歯はに酸化鉄さんかてつを塗ぬって黒くする。

(注2) 奔放ほんぽう…思うままにふるまうこと。

(注3) 女房にようぼう…貴族などの世話をする女性。

(注4) 下仕しもつかえ…貴族などの身の回りの世話をする人。

(注5) 輪廻りんね転生てんせい…魂たましいは色々な体に生まれかわり死にかわるといふ思想。

(注6) 看破かんぱ…見破みやぶること。

(注7) 御簾みす…貴族などの部屋のすだれ。

問一 ――線①『「虫めづる姫君」』は、どういう虫が好きなのですか。十字以上十五字以内でぬき出しなさい。

問二 ――線②『「枕草子」』の作者名を漢字で書きなさい。

問三 ――線③で「新しい文学の形であったと言える」とありますが、なぜそう言えるのですか。説明しなさい。

問四 — 線④で「理路整然とお父さん、お母さんに反発する」とありますが、反発の具体的な内容を示している部分を、六十字前後でぬき出し、始めと終わりの五字を書きなさい。

問五 — 線⑤「それでも姫君ですから」とあり、この姫君は姫君らしい行動もとっているのですが、それはどのような行動ですか。次の中からその説明としてもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父母に反抗しながらも、眉毛などを繕うことをしている。

イ 男に見られていることを恐れ、家の中にかくれる。

ウ 身近な人以外には、虫好きであることをかくしている。

エ 女房たちに、自分の良いうわさを流させている。

オ 下仕えの男の子たちが来ると、几帳のかげにかくれる。

問六 — 線⑥「鬼と女とは人に見えぬぞよき」とありますが、このようなことを守っていた当時の姫君たちは、どのようにして結婚相手を見つけていくのですか。次のア〜カの中から正しいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 姫君の父母が、貴公子を姫君に紹介する。

イ 女房たちが貴公子からの手紙の返事を書く。

ウ 姫君から積極的に手紙を貴公子たちに送る。

エ 女房たちが手引きして、お見合いをさせる。

オ 貴公子たちに自分の姿を見せに行く。

カ 女房たちが姫君のうわさを流す。

問七 — 線⑦「今、考えている虫」に当てはまらないものは何ですか。文中からすべてぬき出しなさい。

問八——線⑧「右馬佐」はどのような人だと説明されていますか。次の中からその説明としてもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 手先が器用でへびが鎌首をもたげる仕掛けを作った人。

イ 姫君の女房が代筆した返事を受け取った人。

ウ 普通とはちがう姫君に興味を強く持っている人。

エ 変わった性癖の姫君が気になり、ちよっかいを出した人。

オ 下仕えの男の子たちに混ざって姫君と虫遊びをしている人。

問九——線⑨「右馬佐は変わった女だと思って」とありますが、「右馬佐」は「虫めづる姫君」のどのような性格に注目しているのですか。具体的に説明しなさい。

問十——線⑩「蝶めづる姫君」を言い換えている言葉はどれですか。六字でぬき出しなさい。

問十一「蝶めづる姫君」が描かれている意味を、筆者はどうか考えていますか。次の中からその説明としてもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「蝶めづる姫君」のような、常識にしばられている当時の貴族たちの考え方を、暗に批判しようとする目的があった。

イ 毛虫も美しい蝶の本地なのだから、「虫めづる姫君」と「蝶めづる姫君」はそのままでも美しいということを示している。

ウ 「蝶めづる姫君」という女らしいお姫様と対比させることで、「虫めづる姫君」の変わった点を引き立たせている。

エ 毛虫もやがてきれいな蝶となるように、「虫めづる姫君」も女らしい姫君になる可能性がある、ということを示している。

オ 当時の常識にしばられた姫君を出すことで、自分の態度を貫く「虫めづる姫君」をほめたたえるという目的があった。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

広島(戦前・戦中は「広島」と表記されていた)では、原子爆弾が投下されてから二十五年が経っていた。市内の中学校に通う美術部員の希未と俊は、秋の文化祭に向けて、「あのころの広島とヒロシマ」をテーマに、美術作品を発表することになり、全校生徒からも作品を募集することにした。しかし、顧問の吉岡先生は、体調を崩して入院してしまった。生徒たちは、自主的に戦前・戦中の広島について調べることにした。

「昔の写真が教官室にある。あれ、持ってこよう(持ってこよう)」

「教官室、閉まっとらん?」

「準備室側はたぶん開いとる」

教官室はしばらく施錠してあったが、最近準備室側は開けてあることが多かった。美術部の生徒が画集や資料を自由に使えるようにと吉岡先生が学校に連絡してくれたそうだ。

「そんな写真、あったっけ?」と俊たちが話しているところへ、副部長が持ってきたのは、西側の壁にそれだけ掛けられているあの写真パネルだった。

「これ、なんの写真か、知っとる?」

上級生は知っていたが、希未たちは知らなかった。

「昔の原爆ドーム。原爆が落ちる前の」

① 下級生たちはびっくりした。

それは人びとが親しみをこめて陳列館と呼んだ、かつての産業奨励館の写真だった。チェコの建築家が設計した美しい建物だ。

希未たちも平和記念資料館で目にしたことがあったはずだが、こんなに光輝く姿は見たことがなかった。

何かの催しか、お祭りのときに撮られた写真だと思われた。日が落ちてまもなくの時間帯だろうか、まだ少し明るい空の下で提灯が輝いている。わずかに残る空の光と人の点す光がないまぜになって素晴らしい効果を上げていた。

「吉岡先生が撮ったんかなあ」

「ものすごい、きれいでハイカラな建物じゃったって言うとられた」

「僕も聞いた。あのころにパイプオルガンまであったんと」

みんなは写真を取り囲んだ。

無惨な骨組みだけになった原爆ドームからは想像もできない。華やかで堂々とした建物だった。

教官室に行くたび、何度も目にはしていたはずなのに、希未はその写真から原爆ドームを連想したことがなかった。下級生たちはみんな、同じように感じたのだらう、しばらく口を閉じてその写真を見つめた。

ぐるりに吊るされた提灯が賑やかな光を放って、奨励館をまるで一つの大きな明かりのように輝かせている。手前に写る人びとは浴衣や夏の軽装で、手に手に団扇を持って写っている。

「……お祭りかなんかのときの写真かなあ」

「十日さんとか」

「十日さんのお祭りって、そのころからあったん？」

「戦争中もお祭りって、やっとなんかなあ？」

部長がパネルを裏返してみたが、そこには「光のうつつしえ」と書いてあるだけだった。日付などの記録はない。

「うつつしえって？」

「写真のこと」

「絵の意味もあるって、先生が言うたられた。大切な姿を描いたり写したりしたもののことをいうって」

上級生たちが意味を訊ねたとき、先生は「うつつしえ」という言葉から始めて「絵」の起源だといわれている話をしてくれたそうだ。旅立つ人の似姿を心にも目にも留めようとして、影を写したのが始まりだと。図録を開いて、この伝承を描いた作品の一つも見せてくれたという。乙女が、壁に映った恋人の影の輪郭をなぞっている絵だった。

「光のうつつしえかあ……」



上級生も下級生も写真パネルを見つめた。

光輝く産業奨励館が永遠に失われてしまった今となつては、そのタイトルは A ふさわしく思われた。

希未や俊ら美術部員は、それぞれが家族や知り合いから、原爆が投下される前、投下された時、投下された後の、広島の人びとの様子を聞いて回った。

野球部員の耕造も作品を応募してきた。彼は、祖父母から聞いた、女学校の先生をしていた伯母、澄子さんの話を絵にした。

吉岡先生には婚約者の聡子さんがいた。ある日聡子さんは美術室で、先生の描いている戦争画に疑問を投げかけたところ、先生から冷たい言葉を返された。聡子さんはさびしげに帰っていった。先生は美術室の窓辺から、校庭を去りながら先生の方を振り向き、校門でも振り返って丁寧にお辞儀をして帰っていく聡子さんを見た。彼女はその後原爆によって亡くなり、遺骨も見つからなかった。先生は、美術室での自分の態度をとっても悔やんだ。遺品として、先生が聡子さんにプレゼントした、お月見の日に差す、兎の飾りのある櫛だけが見つかった。

俊の近所に住む須藤さんという婦人は、夫が戦死し、まだ幼かった息子の健児くんを原爆で失い、一人ぼっちになった。健児くんは、朝、庭の池で遊んでいて水をかぶり、洗いたてのシャツとズボンをアオミドロだらけにして汚してしまった。須藤さんにきびしくしかられたまま学校に向かった健児くんは、その後すぐに原爆で帰らぬ身となった。須藤さんは、遺体の焼け残ったシャツに、アオミドロで汚した痕を見つけ、優しく見送ってやれなかったことをひどく後悔し続けた。

希未の父は原爆で妻を失った後に再婚し、希未が生まれた。希未の母は、毎年の灯籠流しに、夫の前妻の名前を入れた灯籠と、名前が入っていない白い灯籠の二つを流していた。希未はその白い灯籠が誰のためのものか不思議に思っていた。

希未は、去年の灯籠流しの夜に、見知らぬ婦人から見つめられ、自分の年齢や、母の年齢などをたずねられたことがあった。希未は一方で、自

分の母が、ひそかにある写真を持ち続けていることに気づいていた。その写真には、今の希未とそっくりな若いころの母と、見知らぬ青年とが写っていた。その青年は、実は母の恋人で、戦死していた。見知らぬ婦人は堀田道子さんといい、その青年、慎司の母親だった。堀田さんは、希未が戦死した息子の恋人とそっくりだったので、思わず声をかけたのだった。希未は祖母から堀田さんの住所を知り、手紙を送ると、すぐに返事が来た。そこには灯籠流しに寄せる思いがうつられていた。

吉岡先生は病院から特別に許可をもらって文化祭に参加し、美術部の展示作品を見て回ることとなった。

それぞれのヒロシマ―父母や祖父母たちから聞きとったあの日のこと、会ったことのない身内や近隣の人びとの姿―が、さまざまに描きだされていた。ほとんどの作品に短いコメントや説明文がつけてあった。

生徒たちは、身近な人びとの心に深く落ちていた苦しみや悲しみ、あの日までの楽しみや喜びを描こうとしていた。

どの絵にも稚拙だとか上手だとかを超えた思いがこもっているようだった。平和記念資料館に展示されている、被爆者たちが描いた絵のように。一般公募の展示の真ん中あたりに、耕造の絵があった。縁側で語らう少女たちをクレヨンで描いていた。

③ 真ん中において晴れやかに笑っているのは若い女性である。少女たちはみんなで六人。制服の少女たちは肩をぶつけあうようにして仲良く座っていた。背景の座敷には、戦時下では飾れなかったはずの雛壇らしいものが描いてあった。

**C** 大きい。だが、今にも少女たちの笑い声が聞こえてきそうな、いかにも耕造らしい明るい絵だった。添えてあるのは、あの歌だ。

(太き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨集まれり)

そしてその下に、「祖父母は毎年、黄色の灯籠一つと桃色の灯籠を六つ流します。女学校の先生だった長女とその教え子の生徒さんたちのためです」と書いてあった。

先生は耕造の不器用な、だが、心のこもった絵を長いあいだ見つめた。

希未は絵を二枚出品していた。一枚目は灯籠流しの情景だった。寄りそって流れていく灯籠のあとから、流されるのを待っている白い灯籠。その灯籠を囲んでいるのは希未に面差しのよく似た二人の少女と年配の女性だ。年配の女性が手にしているのは一枚の写真で、少女の一人は胸に文

庫本を抱いている。そしてもう一人は筆を持って、今まさに灯籠に名前を入れようとしているところだった。

タイトルは『うつしえの少女』としてあった。この絵にも短歌が書き添えてあった。

へうつしえに戦死せし子と並びたる少女よいづくに母となりいる 小山ひとみ

もう一枚には、窓辺から校庭を見下ろして手を振っている人と、振り返ってそれに応えている女の人が描かれていた。女の人は結った髪に櫛を飾っていた。この絵にはコメントや説明はなかったが、タイトルには『お月見の櫛』とあった。

吉岡先生から希未に電話があったのは次の日、文化祭代休の月曜日のことだった。

「この夏、灯籠を流せんかったから、今晚灯籠流しをしようかと思うて……」

希未が聞きかえすより先に、先生が続けた。

「君らの作品は、ほんまによかったね。あれを見たら、これまで自分のことばかり考えてきたような、自分のためばかり悔やんできたような気がますますしてね、恥ずかしかったよ」

なんと言っているかわからないで、希未は受話器を握りしめた。

④「真の意味で悼む―それができていなかったのかもしれない。ヒロシマのことばかり考えて、ほかの世界のことがまるつきり目に入らなかったのと同じ」

聡子さんとの別れのことを言っているのだと希未にはわかった。でも、「真の意味で」ってどういうことなのだろう。

「真の意味で悼むって？」

「大切な人の死を受け入れて見送ること、心に刻むこと……」

希未は電話のこちらでうなずいた。四半世紀のあいだ、それができなかった吉岡先生の思いが希未には伝わってきた。

短い沈黙のあとで、先生はまた言った。

「見送って、心にいつまでも刻もうと思う。いなくなった人たちのこと、なんでそんな途方もないことが起きたかということも」

希未は先生の手紙の文言を思い出していた。

「ずっと忘れないでいて伝えていく、っていうこと……?」

「そう。そうできるように祈りながら灯籠を流そうと思う」

先生はふつうの三分の一ほどの大きさの灯籠をいくつか作ったと言った。

「君らのすごい作品に触発されたというわけじゃ」

小さくしたのは、季節外れの灯籠流しで、周辺にあまり迷惑をかけてはいけなさと考えたからだという。

「白い灯籠も作った。七つの灯籠も作ったよ。一つだけ、色を違えて。それから月と兎を描いた灯籠も」

慎司さんと、澄ちゃんとその生徒たち、それに聡子さんのための灯籠だ。

「ほんとですか！ 灯籠流し、私も行っても?」

「来てくれるんか。俊や耕造にも連絡してくれるか? ほかにも来てくれる人がおつたら……」

みなまで聞かずに、希未は「みんな、ぜったい来ます!」と返事した。そして先生に頼み事をした。もう一つ灯籠を作ってくれるように頼んだのだ。健児くんの灯籠を。

こうしてその夕方、吉岡先生、希未と母、俊と須藤さん、耕造と祖父は、季節外れの灯籠流しをするために元安川の畔に集まることになった。十月の川辺には心地よい風が吹いていたが、日が落ちると少しだけ寒くなった。

冷たい風が先生の体にさわらないかなと希未は心配になったが、希未のお母さんもそう思ったと見えて、「どこかで温かいもんでも……」とあたりを見まわした。

先生はにっこりして断り、ダスターコートのポケットからくしゃくしゃのマフラーを取り出して首に巻き付けた。

みんなは先生からそれぞれ小さな灯籠を受け取った。絵が描いてあるものもカラージュが施してあるものもあった。

耕造と祖父は七つの灯籠を受け取った。黄色の灯籠にお祖父さんが「澄子」と書いた。残りの灯籠にはお祖母さんと手分けして少女たちの名前を書いた。「敏子、加奈子、昌子、洋子、昭子、紀子」である。薄紅色の和紙には、それぞれ愛らしいお雛様が描いてあった。

須藤さんは青い灯籠を受け取った。少年が元氣いっぱい跳ねて、こちらを振り返っている絵が描いてあった。

お母さんが受け取った灯籠にだけ絵がなかったが、かすかに銀を散らした白い和紙の灯籠は、たそがれの光のなかでいかにも清々しかった。

名前を書き終わると、みんなで川辺に下りていった。

もはやすっかり暗くなり、向う岸の原爆ドームは、暗い影を川面に落としていた。

川辺には船着き場のようにしつらえてある木組みがゆらゆら揺れていたが、その上に小さな灯籠を並べて、吉岡先生が順々に火を点していった。<sup>⑦</sup>最後に火が点されたのは、白い灯籠だった。先生の手元を見ていた希未の心に、堀田道子さんの手紙の一節が蘇った。

(……灯籠流しを初めて見たとき、⑧に聞こえるかもしれないが、なんとという美しい慰霊の習慣であろうか、と思いました。赤や緑の色紙で貼られた灯籠が、ひとたび火を点されると、まるで命を吹き込まれたように内側から輝いて、この世のものとは思われない光を放ち始める……)

堀田さんの書いていた通りだった。それぞれの灯籠は、命があるかのように内から輝きはじめてののだ。

吉岡先生が膝をついて聡子さんの灯籠を流した。須藤さん、耕造の祖父母、希未の母がそれに続いた。

灯籠は、次々と真つ暗な川に滑り出していった。

月と兎の描かれた可憐な灯籠のあとを、はしゃぐようにくるくる回りながら青い灯籠がついていった。<sup>⑨</sup>

少女たちの灯籠は澄子先生を真ん中に花のように浮かび、愛らしい花の名残を惜しむかのように白い灯籠はゆっくりと流れていった。

(……この世のものとも思われない光を放ちながら、静かに川を下っていきました。まるで、いっしょに旅していく魂のように)

堀田さんの言葉をくりかえし心に鳴らしながら、希未はこの灯籠もまた「うつしえ」の一つのかたちなのだと悟った。<sup>⑩</sup>

旅立っていく人の面影を目にも心にも留めるために——大切な人たちを消して忘れないために——吉岡先生は灯籠を作ったのだ。

(朽木祥著『光のうつしえ 広島 ヒロシマ 広島』より一部改変)

問一 —— 線①「下級生たちはびっくりした」とありますが、なぜびっくりしたのですか。説明しなさい。

問二 —— 線②「光のうつしえ」の「光」は、ここではどういうものを指しますか。文中から十五字でぬき出しなさい。

問三 A C に入る言葉を、次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア やけに

イ やはり

ウ なおさら

エ あたかも

オ ついに

カ とうてい

問四 —線③「真ん中において晴れやかに…みんなで六人」とありますが、この人たちはどういう人たちですか。次の中から、その中にふくま

ないものをつ選び、記号で答えなさい。

ア 澄子という人

イ 耕造の祖母

ウ 耕造のおばの教え子たち

エ 原爆でなくなった人々

オ 耕造の祖母の娘

問五 —線④「真の意味で悼む」とはどういうことですか。説明しなさい。

問六 —線⑤「一つだけ、色を違えて」とありますが、これは、何色の灯籠ですか。

問七 —線⑥「月と兔を描いた灯籠」とは、だれを悼むためものですか。文中から、その名前をぬき出しなさい。

問八 — 線⑦「最後に火が点されたのは、白い灯笼だった」とありますが、これを川に流したのはだれですか。

問九 空らん ⑧に入るのに最もふさわしい語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般的

イ 自分勝手

ウ 芸術的

エ 幼稚

オ 不謹慎

問十 — 線⑨「はしゃぐようにくるくる回りながら」とありますが、この描写は、何を意味していますか。次の中からその説明として最もふさわしいもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア 俊が生きていたころの、とても無邪気で元気いっぱいだったようです。

イ 季節はずれの灯笼流しなので、普段より小さく作っていたということ。

ウ 須藤さんの息子の、子どもらしい元気なようすと重なって見えるということ。

エ 吉岡先生が、希未たち教え子の元気なことを願って作ったものだという事。

オ 少女たち六人が、先生を囲んで仲良く笑いながら遊んでいるようす。

問十一——線⑩「この灯籠もまた「うつしえ」の一つのかたちなのださとと悟った」とありますが、希未は何を悟ったのですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この川で灯籠を流し、死者を悼む光景こそが、未来に向かって伝えていくべきものであるということ。  
イ 灯籠を流すことも「うつしえ」と同じように、死者を悼む習慣という点では同じであるということ。  
ウ 灯籠が、この世のものとも思われない光を放っているのが、「光のうつしえ」と重なるということ。  
エ この灯籠も、原爆でなくなった大切な人を見送り、心に留めておくためのものであるということ。  
オ 川に流す灯籠が、「うつしえ」の起源と同じく、恋人を思いしたうものだとわかったということ。

〔三〕 次の——線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① 左右サイショウの凶形。  
② 雨天ジュンエン。  
③ 無理なカジュウがかかってこわれた。  
④ 病巣を取り出す。  
⑤ 厳かなようす。  
⑥ お金の出納をきちんと管理する。









